

西表島水域漁場開発計画調査（要約） （ノコギリガザミ増殖場造成実験調査）

大城信弘・島尻広昭・友利昭之助・手塚信弘*

本調査の詳細は昭和59年度、沖縄特定開発事業推進調査（昭和60年3月・沖縄開発庁沖縄総合事務局農林水産部）において報告したのでここでは要約を記す。

- 本調査は沖縄開発庁沖縄総合事務局の委託により昭和57年度から引き続き実施しているものでマングローブ地帯におけるノコギリガザミ増殖場造成の基礎資料を得るのを目的とする。
- 本年度は西表島船浦を中心に、稚ガニの分布調査、環境調査を行ない、またメガロップ幼生、食害生物等の予備調査を行なった。
- 船浦でのノコギリガザミ稚ガニは干潟西端部に最も多く、次いでヒナイ川－西田川間のマングローブ林縁辺部で、それらの中心部から離れる程分布は少ない。
- 干潮時の調査では小潮時の満潮線を上限とし、その下方50cmまでのゾーンに多く出現した。
- 稚ガニは成長に伴い、マングローブ林内、河川部、深み等へ分布を拡大する傾向を示した。
- 稚ガニは潮間帯上部の最も環境変動の大きいゾーンに出現するが、その中では間隙水のある、相対的により安定した場所に多い。
- 水深的には汀等の浅部で観られ、干潮時の観察では水深2cm以下に多い。
- ノコギリガザミと思われるメガロップ幼生がネット調査で採集された。
- 増殖手法として当面は種苗放流が有効と推測されるが、網仕切り、人工投餌等、養殖の手法を加える事によってその効果はさらに高まるものと考えられる。
- その際にはノコギリガザミのみでなく他の種を含めて複合的に行なう事により、マングローブ域をより有効に活用できるものと推測した。

*：非常勤職員